

世界の医療を考える会

青木 勉, 菊地 泰基

世界の医療を考える会の創設期について

私たちが、世界の医療を考える会を創設したのは、1985年でした。母体は、社会医学研究会の複数のメンバーと、その友人たちです。社会医学研究会では、主として長野県阿南町和合をフィールドとして地域医療について研究していましたが、「国際医療協力を目指して医学部に入った」「マザーテレサに憧れて看護学校に入った」と世界に視野を広げている仲間が集まりました。当時は全国的に見てもまだ、国際医療協力を標榜する部活は珍しく、クラブ活動になるとは思っていませんでしたが、千葉大学内は医学部、看護学部、看護学校、そして学外では日赤看護大学からも次々に関心を持つ学生が集まり、定期的に勉強会が始まりました。『Where There Is No Doctor』というプライマリヘルスケアの本を皆で翻訳して、徹夜で印刷製本したり、その本に記載されていた簡易トイレをサークル会館の横に作ったりと、精力的にそして和気あいあいと活動が続けました。

次第に、学生として海外で国際協力をしてみたいという機運が高まり、千葉大学の先輩で、当時フィリピンで医療協力をされていた星野邦夫先生に連絡をしたところ、快く受け入れて下さり、1987年夏、同級生4人とともに初めてフィリピンを訪れました。現地の小児科医やライオンズクラブの方々から歓迎を受け、巡回診療に同行させて頂き、フィリピンの医学部生とも交流を持ちながら、星野先生がなさっている国際医療協力を見聞することが出来、本当に多くのことを学ぶことが出来ました。また、あまりの富の偏在ぶりに愕然として、自分たちの目指す医療の公平性をどのように達成すべきなのかという強い疑問を持ちました。翌年から星野先生のご支援と千葉大学医学部細菌学教室、寄生虫学教室、公衆衛生学教室の先生方のご指導により、公衆衛生の実習をかねて、小児下痢症の研究をフィリピンの州立病院を中心に行いました。フィリピンの農村を部員皆で回って、集めた子どもの下痢の検体を、千葉大学附属病院から持って行った培地で培養し、原因菌の特定を行いました。公衆衛生の発表会には、フィリピンから帰国していた星野先生が参加して下

さり講評までいただき、大変感激しました。そして、この活動はプロジェクトとなり、その後も後輩達に引き継がれました。

私は、当時から精神科に興味をもっていましたが、下痢はフィリピンの死因の第6位で、私たちの日本の6位は自殺であったことが、非常に驚きでした。医療にアクセスすることが経済的な問題で出来ず、下痢で幼い命を落としてしまう国と、心理的な問題で自らの命を自らの手で絶たざるをえない国、異なる国の共通する病理を肌で感じ、悩んだ経験が現在の診療の原点ではないかと思います。千葉県の北東部に位置する総合病院精神科で、救急や外来にお見えになる多くの患者様と触れるとき、私たちが抱える「貧しさ」をどのように克服していくべきなのかを直面させられ、「世界の医療を考える会」創設期の自分との邂逅を経験しています。また、診療の傍ら、NPO活動を通じて、カンボジアでデイホスピタルや診療等の国際精神保健協力を行っています。が、「世界の医療を考える会」での経験と知識が、大変役に立っています。当時ご指導いただいた多くの先輩方や先生方、そして共に活動した仲間たちに、この場をお借りして御礼申し上げます。そして、「世界の医療を考える会」の益々のご発展とご活躍を祈念して、筆を置きたいと思います。

(あおき つとむ)

世界の医療を考える会の今

私が青木先生の創設なさった世界の医療を考える会に入部したのは、今から4年前の1年生の時でした。入学式の部活紹介で、「安く留学できます!」というのを聞いて、海外に行ってみたいと思っていた私は、友達を誘って説明会に行ったのを覚えています。説明会は説明会というほどではなく、綺麗とは言えない部室で、国際医学生連盟 日本(以下IFMSA)を通して安く留学できるということだけの説明でした。8万+渡航費で留学に行けると聞き、海外で生活してみたかった私は、迷わず入部しました。その頃、世界医療での活動といえば、主だったものは留学だけで、後は、個々の活動に任されて

第5章 交友の広がり

いました。それは世界医療がサークルであり、IFMSAの内部で活躍しているものや、別の団体に所属しているもの、他大学と交流して色々なことをやっているもの、一方で何もしていないものなど様々な人間で構成されていることも一つの要因だと思います。

現在の世界医療では、他の部と兼部しているものが多いこともあり、代表を2年生で務めます。私も2年生のときに世界医療の代表を務めました。代表といっても仕事と言え、4月の部活紹介でのサークルの説明、新歓コンパと追い出しコンパのセッティングをするくらいでしたが、前の代表から何も引き継がれなかった私は、意外と大変だったのを覚えています。特に1年生のうちは何も活動をしていなかったのも、活動内容も全くわからずに臨んだ部活紹介では、スライドが使えないというアクシデントもあり、散々だったことは今でも忘れられません。こうして始まった代表の年でしたが、この年は世界医療としての活動も少し増えた年でもありました。まず、現在6年生の先輩により、初めて千葉大単独で行われたぬいぐるみ病院。ぬいぐるみ病院とは、幼稚園児を対象としたもので、園児の病院嫌いの克服と医学生が簡単な言葉で園児に診察するスキルを身に付けることを目的とした活動であり、世界規模で行われているものです。先輩が千葉大学附属幼稚園に掛け合ったり、志願者を募ったりと多大なる努力の結果、実現しました。次に外国人無料健康相談会への参加。これは元々主催している団体があり、お手伝いという形で希望者を募って参加していましたが、数年前から参加者が減り、もう千葉大学からの参加者がごくわずかとなっていました。それを再び、大々的に宣伝し、世界医療からたくさんの人間が再び参加するようになったのもこの年からでした。このように世界医療は以前よりもみんなと活動

する機会が増えたことは喜ばしいことであり、代表としての私にとっても、とても嬉しいことでした。

この年、もう一つ世界医療の転機となったことがありました。前年まで顧問を務めてくださっていた神経生物学前教授の山下先生が他大に行かれることになり、後任の先生を探さなくてはならなくなったのです。当時、顧問をなさっていない先生にお願いするのがいいと思い、神経情報統合生理学教授の清水先生のところをお願いしに伺ったところ、清水先生は気さくな方で、快く引き受けてくださり、胸をなでおろしたのを覚えています。快く引き受けてくださり本当にありがとうございました。

私はといえば、この年前述した世界医療を通した留学プログラムでオーストリアに1ヶ月間留学しました。本当なら、英語圏に行くというのが普通だと思いいになる方が多いかと思いますが、IFMSAでの留学は、英語が堪能でなくては英語圏には行けないのです。ですから、英語が母国語ではない地域に留学しました。1ヶ月間、日本人どころか、東洋人が一人もいない中に一人で飛び込み、つたない英語でコミュニケーションをとり、研究室で実験を行っていました。また、週末は仲間と、また時には一人で旅行に行き、色々なものを見ました。本当にサバイバルで日本人がいかに英語を話せないかをものすごく実感しましたが、いい経験が出来て、本当に有意義な1ヶ月でした。

現在、世界医療があるのは、青木先生が創設してくださり、それを引き継いで現在まで続けてきて下さった先輩の方々のお陰です。また、清水先生をはじめとして、顧問を引き受けて下さった先生方のお蔭でもあります。多くの方の努力により、このサークルが存続し、私とその部員になったことに感謝しています。本当にありがとうございました。

(きくち やすき)